

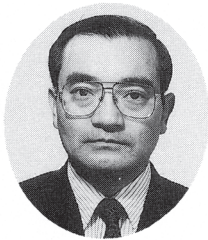
(Japanese Academy of Learning Disabilities)

## 日本LD研究会会報

第2号



事務局：長瀬総合療育研究所内 〒164 東京都中野区東中野5-5-10 R.H.S.2F  
TEL&FAX. 03-3360-1855



## はじめにLDがいた

## LDは教育とともにあった

東京学芸大学教授

上野 彦

やっと日本にもLD研究者、関係者の交流、情報交換の場ができたこと、心から喜んでいます。

30年も前のこと、当時イリノイ大学の教授で発達障害児の早期教育の提唱者として知られたサムエル・カーク博士がNHKの招きで来日し、全国を講演してまわりました。その時の講演記録を恩師である故三木安正教授から見せていただいたのが思い起こせば、私とLDとの最初の出会いでした。私は大学の教育心理学の専門コースに進学したばかりの学生でした。

LDという名称普及のきっかけは、当時、知覚障害、脳障害、あるいは神経学的障害などと呼ばれてきた子どもたちへのよりよい補償教育を求め、その親と専門家によって1963年シカゴで開催された大会でのカーク博士の記念講演であったことはよく知られています。この大会は、米国学習障害協会（Learning Disabilities Association of America: LDA）設立の契機となりました。

こうして1960年代になって、それまで一部の大学や研究所などの医学や治療教育の専門機関で、

特異な遅れやつまづきをもつ臨床対象として扱われてきた一群の子どもたちが、初めて特別な教育対象として、大きな一歩を踏み出したのです。

専門機関（クリニック）から学校（クラス）へというLDにとっては大きな歴史的流れの変換点でもありました。1975年に施行された米国の連邦法「全障害児教育法（現IDEA）」に基づく個別教育プログラム（IEP）によって特別な教育援助を受けているLD児は、一気に二百万人近くまで、その数を増やし、今日に及んでいます。

そうした特別な教育ニーズをもった子どもたちは、新しい障害児として突然登場したのではなくよく分からないままに放置されてきただけなのです。それぞれの子どものニーズを満たす教育のなかで、取りこぼしてきたに過ぎないのです。

目の前にいる子どもたちに対して、それぞれのニーズを把握し、効果的に与えきる教育こそが、LDを含む全ての子どもたちの明日の教育の原点であり、日本LD研究会もその流れの中で活動できればと思います。